

広津柳浪『雨』論

— 吉松お八重夫婦の悲劇 —

はじめに

『雨』は明治三五年一〇月、『新小説』に発表された作品である。柳浪^①は自己の作風について「一昨年頃から、力めて我れを脱して、人物を種々に描くことに苦心をしたのです」、「自分はこの目的を達する為に、作者の挿評、又は作中の人物の為に弁疏の辞を列ねるやうなことは全くしないことに決心をしました」と述べている。「我れを脱す」とは、作者の主観で作品を作るのではなく、貧困なるが故に繰り返される人間苦悩があるがままに示すことであつたと推測できる。それは、『雨』の冒頭部分に、降りしきる雨の中をお志米という娘がやつてくる、一家の窮乏を救うために八王子の茶屋へ売られていく、その原因として家族の生活がからんでいるという、たたみかけるような展

開があることからも見て取れる。

平 田 恵美子

『雨』は、当時どのように受け取られていたかを見ると、明治三五年一〇月『文藝界』^②の「近刊合評」の中で「弔花」は、「吉松と、濃情にして嬌々たるお八重とが、雨と人との残酷なる迫害襲撃に遭ひて、遂に罪悪を構成するに至るまでの経路」を評価し、「彼の巧緻なる観察は能くこの目的を透徹せしめたりといふべし」と述べ、次に「醒雪」は、「無情なる天候と無慈悲なる老婆とは、終にこの無邪気なる吉松をして、依託品を私せざるを得ざらしめたり」、「その材もその想も、由来今日の貧民窟に頻々たるもの」と指摘し、つづいて「河畔人」は、「柳浪子の戯曲的才能は、遺憾なく發揮せられている」という見解を述べている。同時代評の多くは、描写においては細密ですぐれているが、結構が単純で平々凡々という点に集中している。先

行研究では、吉田精一³⁾が「貧婪淫靡な悪婆の、娘夫婦をはたるおきまりのはこびは型の如くだが、終末を在来の心中にもちこまず夫婦の行方不明にしているのが、常套的悲劇から脱却している。度のすぎた親権に対する抗議の意味を多少ふくめたのもよく、また雨になやむ裏長屋の陰惨な生活の描写に、柳浪一流の迫真性を具へている」と述べ、猪野謙二⁴⁾は「降りつづく長雨のため仕事にもあぶれ、陰鬱に明け暮れる都会の貧民窟の精細な描写が精彩を放ち、そこにいわゆる「社会小説」風な写実小説としての一段の成熟が認められる」と言及している。榎本隆司⁵⁾は「日清戦後の現世的・写実的文学動向が、悲惨小説や深刻小説から、あわただしく社会小説とか政治小説を求め、さらに、未分化・未消化のままに新しい試みを重ねる中できわめて錯綜した文学状況を生んでいった」そうした状況把握を前提として「雨」を位置づけて見る必要があるとし、「柳浪がはらんでいた可能性（「雨」が内包していた「社会小説」としての側面や客観的写真）は、時の空隙を埋め得るものであった」にもかかわらず、「その可能性を生かし切れなかったのは、柳浪の側に理由があったと同時に、早熟未分化な日本の「近代」を生きなければならなかった時代の文学のゆえであった」と説く。これに對して、大塚博⁶⁾は「「雨」のリアリズムは、おりからの社会小

説、あるいは社会主義小説の流れにつながらなかった」と指摘し、「当時の時勢」「労働社会の大勢」というも社会的現象の把握であり、社会の構造的認識、分析ではないのである⁷⁾、「柳浪側にも限界があった。社会構造への認識欠如である」と論じている。

本稿では、「雨」を主たる考察の対象として、柳浪の『段だら染⁷⁾』の長女お妻と比較しながら、『雨』のお志米一家の窮乏の描かれ方、人身売買の実例など、同時代の状況について考察し、その作業を通して、柳浪の問題意識を提示することを目指していきたい。

一、貧民街の窮状

まず、吉松お八重夫婦が現在どのような状況に置かれているかを押さえるところから論じていくこととする。

『雨』では、冒頭から最後の第九節の初めまで雨が降り続けている。主人公の吉松お八重夫婦の長屋は「其新網を町の名に呼ばれながらも、これは尚其入口を大通に控へた三軒立の長屋がある。其長屋の南の端左は横町に沿うた角の家」という記述がある。

ここであらためて注目してみたいのは、この長屋が、貧民窟とはきわどく境を接した位置に設定されている点である。吉松は「早く一軒前の店を作えて」とつぶやくが、吉松がそのような野望を持つことができるのは、収入にわずかでもゆとりがあるためと考えられる。

新網町の貧しい人々の実態を訴えた松原岩五郎のルポルタージュ『最暗黒の東京』には、新網町の下層社会の悲惨な状況がリアルに描かれ、細民たちの厳しさが記されている。『雨』においても、お八重のところへ、「直ぐ傍の横町——これより内は別世界とさる、貧民窟」といわれる新網町に住むお志米という娘がやって来る。

三処ばかりばらり引裂けた古蛇目傘を半開にして、肩まで藏れるばかり深く翳し、形も消果てた中形の浴衣に、帯と云ふも名ばかり、男物と女物との古下駄を片足づゝ、跛では無いかと思はるゝ歩調で歩いて来て、件の家の前に佇立んで少時考へて居た(一)

語り手は、お志米の服装、傘、下駄等に最下層の姿を説明し、読者を作品の世界へと導き入れる。「だって、私の宅なんか」と、

お志米は顔をしかめて、「三畳一間限だのに、七人なんだから、辛つと坐れるはかしなのよ。加之に汚穢くつて、人が住んでる様ではないは。姉さん宅は本統に奇麗ね」と、お八重の住まいを羨む。また、お八重は「角通の小紋の浴衣の尚だ左まで古からぬのに、赤萬筋の瓦斯の絆天を、襟寛かに引掛け、南京縞子と御納戸地に白く七草を抜いた中形メレンスとの昼夜帯、鬢の毛一筋乱れて居らぬ」というように、最下層の女性の服装ではないことが紹介される。語り手の提示する情報はお八重をことさらになまめかしく語るからこそ、お志米との落差が大きいことを明示するのである。

お志米の訴える惨状は、『文藝倶楽部』の明治三五年六月から一二月まで連載の不通庵「浮世眼鏡」「貧民窟(一)」にも重なる。そこには「素より畳が何うだの、建物が何うだのと云ふ穿鑿は、此社会でいふべき事でない、床は持ちあげることも出来ないぐちやぐちやで、琉球表は見事に切腹して、所々から臍を出し、それが汚染てほとくと成て」と、お志米の言う「加之に汚穢くつて」と同じように、貧民窟の生活が写しとられている。

お志米は、降り続く雨による一家の窮乏を救うために、「田舎の料理店へ奉公に行けつて、阿父さんが……」と、八王子の

「料理屋」へ行くことになる。不通庵の「貧民窟(四)」にも「若き娘を持つ親々は、近所から羨まれ「お前さん方は、何も心配しなされることはない、立派な姉さんが居なされるのだから」と言ふ、若き娘のある家の家庭がまあ是である。貧民窟からも各種の工場へ手間取りに出る娘はあるが、年頃のものとは表よりは裏の稼ぎに因て収入がある其収入は家の生活を助る」(※傍線筆者、以下同じ)という記述があり、『雨』のお志米と通い合うものを見ることが出来る。

明治三十五年七月一日の『東京朝日新聞』「梅雨と細民」は、「梅雨前から雨が多く其後は尚更降り続きで其日暮らしの細民は稼ぎの途も塞がり何うして一家を養なつて居るかと思はれる」と報じている。また『日本気象総覧(上)』から明治三十五年八月の東京の降水量を拾い出してみると、三二〇・三mmであった。前年の八月の降水量は五三・八mmと、明治三十五年八月の雨量が多かったことがはっきりと読みとれる。また、『雨』の中に「先づ米屋を手初として、酒屋質屋などを打壊が初まるであろうと、穏やかならぬ噂さへ立つて、引立つは米の値ばかり、一五圓を割るは今の間と、蠣壳町の繁昌に引替へ」と、うなぎ上りの米価は間もなく一五圓を超えようとする記述が見られるが、明治三十五年八月一七日の『東京朝日新聞』「定期米暴騰」には、

「東京米穀市場に於ける定期売買は天候引続き不良にして米作の到底面白からざることを一層深く感ずるに至りたるより日々昇騰」、「昨日の如き当限一五円三十五銭中限十五円四十銭」と、雨による急激な米の値上がり記されている。

この章では、雨による細民の難澁を考察した。物語は吉松お八重夫婦の住む長屋は貧民窟の中にあるのではなく「直ぐ傍の横町」であるが、お志米の苛酷な状況を描くことは、読者を吉松お八重夫婦の悲劇へ導入する重要な機能を有している。

二、律儀な吉松

『雨』は、紺屋の仲間取職人である吉松を描いているが、前掲「近刊合評」の「弔花」が、「柳浪が最初描かんと試みたるは、江戸ツ子的熾熱性と忍辱性とを併有せる吉松と、濃情にして嬌々たるお八重とが、雨と人との残酷なる迫害襲撃に遭ひて、遂に罪悪を構成するに至るまでの経路」と指摘するとおり、吉松は正直で、律儀な人物で、お人好しな江戸っ子風に描かれて

いる。「見ねえ、乃公の手を。」と、吉松は淋しげな笑を漏しな

から、「滅法奇麗に成りやがつたぢやねえか。」(中略)「乃公が早く一人前に成りせえすりや、今の思はさせねえが、何を云ふにも紺屋の手間取職人じや仕様が無え。」と、吉松は嘆息しながらも不図思出した体で、「お八重、親方の方の話も旨く行かねえや。」(中略)此雨統じやア何する事も出来ねえ。手前の事だから、何とか為て遣りてえんだが、さう／＼前借も出来ねえから、此処は一番耐忍して貰ひてえツて、斯う親方に断られて見ると、それでも無理に貸してお呉んねえたア、乃公には何も云へねえや(三)

右引用に「乃公の手を」、「滅法奇麗に成りやがつたぢやねえか」とあるとおり、ペランメエ調の紺屋の手間取職人さえ、雨が降りつづいて日銭が入らなくなれば、たちまち困窮する姿が描写されている。ここで、当時の紺屋の手間取職人の状況はどうであったのか見ていきたい。吉松は親方に給料の前借りを頼むが断られる。若い当時の職人(染物職)の賃銀は横山源之助『日本の下層社会』¹³⁾によれば、染物職の日本全国平均賃金について、「各職人のうち賃銀最も高きは洋服仕立職」、「最も低きは下駄職・染物職・陶器轆轤師・綿打・漆掻・紙漉・版摺」とある。また、横山は、明治三二年の職人の地位を「しかるに今

日、出入先の関係、主従的習慣は漸次消滅して請負に性質を變じ、雇主は特に出入職人なりとして一人の職人に定むることをせざるのみならず、職人もまた出入先なりとして尊重を置かざるに至れり」と、人間的な関係をたち切つてしまい、新しく請負という制度が発生したと論じている。女房のお八重に仕立物の斡旋をした親方は吉松の律儀な人柄もわかつていたはずであるが、金を貸さないのは吉松との関係が賃金関係に移行したことを示しているといえる。

ジャーナリズムの世界に身を投じていた柳浪は、デビュー作『女子参政蟻中楼』がそうであったように、時代社会の動向や文壇の情勢に敏感な才能を早くから示していた。代表作の『今戸心中』も『帝国文学』¹⁴⁾に、「一葉の濁江、たけくらべに、多少狭斜の地を描きて、世評大によりしより、柳浪が続々として所謂狭斜小説を草せしは、これ既に流行を追ふと言ふも可なり」と指摘されていた。しかし、肝心なのはこれらの社会の流行に題材を採った柳浪にどれほどの思想があったかどうかである。冒頭の榎本隆司は「社会小説」が、まさにカッコづきでしか在り得なかつた文学状況が、「雨」をその観点からとらえさせるのであり、あるいは、そうした見かたをうながすかたちで時代の実態があつたと考えるからである」と指摘しているが、

吉田精一⁽¹⁵⁾が「作者の把握力は浅く、概念的で、到底柳浪が思想の人でない」とし、また、福田清人も「社会にも思索の浅かった彼等に、深い社会観の求むべくもない」というように、むしろ柳浪には社会の不条理をまざまざと認識させる思索が浅かったと考えられる。

柳浪は「作の材と其の運用」⁽¹⁷⁾で、「社会小説をかくことにすれば、労働者なら労働者を写すと共に、当時の時勢も見えるやうにかゝなくてはなるまいかと思ふ、例へば、人力挽は憫れな境遇だとか、又時には幸運な地位に立つこともあるが爾なるのに色々な周囲に事情があつてなるのだから（中略）自然にその影の見えるやうに描きたいものです」、「一個人を中心にして、労働社会の大勢を窺ひ得るやうにかゝなくては面白くないと信じているのです」と述べているが、もし、そのテーマを徹底して追求するならば、労働者問題、労働者の怒りという社会状況にメスをいれる必要があるだろう。しかし、柳浪がこの小説の主眼としたのは、社会状況の追求ではなく、貧困とお重の無心によりずる追ひ詰められていきながら、お互いの愛情を失わなかった吉松お八重夫婦の姿だったのでないだろうか。伊狩章は「知りつつ罪を犯す良心の苦しみ、それと知った妻の犠牲的な心など哀れをさそう真味があり」と評している。こ

の「知りつつ罪を犯す良心の苦しみ」は、正直で律儀者という吉松の特質が際だっているからこそであろう。

吉松が雨に濡れて帰つてくると、お八重は裸の吉松に仕立物の袴を着せようとする。客の預り物である。それに対し、「不可⁽¹⁸⁾えく。お客の物を着ちやア済まねえ」と、客の預かり物をことわる吉松の律儀さが描かれている。吉松の「八王子に居た時から、随分苦勞も為て居らア」、「東京へ帰つてからは、お互に苦勞の為ツくら、辛棒の競ツくらを為様ツて約束だ」という言葉は、二人が必死に協力して苦界脱出に成功し、お志木の羨む住居に住むことができたことをうかがわせる。その吉松お八重夫婦を考えるにあたって見落としてはならないのは次の箇所である。

「お前さんはお腹がお飢⁽¹⁹⁾きではないか。」「なアに。」「今夜はあるんだよ。だけど、お菜⁽²⁰⁾が。」と、お八重は勝手に行つて、何か探して居る様であつたが、水口を開ける音をさせて（中略）「今日は後生だから止してお呉れな。私は鳥渡⁽²¹⁾お菜を見て来るよ」（二三）

お八重の出かけた後、吉松の「乃公の事だてえと、自分の事

は忘れツ了^{ちま}ッて、出来るだけの事を為て呉れるんだからな」「氣立が好くツて、實意があツて、亭主を大事にする」とつぶやく言葉からも明らかなように、お八重が吉松との結婚生活において妻としての努めを果たそうと懸命の努力を続けてきたことが強く印象づけられる。その吉松の律儀さがお八重の母お重との関わりを通して悲劇的なテーマを支えるための大きなフアクターになっていくのである。

三、『雨』のお重と『段だら染』のお市

お八重の母お重は、吉松に対する必死の努力も理解せず、それどころか律儀者の吉松の稼ぎに頼る強欲な人物である。お八重は茶屋づとめに出ねばならないお志米を慰めるために、「親の道楽の為に地獄へ墮とされた」身の上話を聞かせる。

一六歳の春八王子の達磨茶屋に売飛ばされて、今年一九の春迄丸三年の間、世にも辛い稼業を為て居た其辛かつた事の数々を物語った。(中略)頃日^{このころ}ではね、又阿母^{おつか}さんが三日に上げず来るんだから、實にうんざり為^{ちま}ッ了^{ちま}ふのよ。八王子から東京^{こっち}へ歸つて来た事も、阿母さんに知らせな

ツたんだよ。それなのに、如何して此処を探し当たんだか、毎日の様に出掛けて来て、やれ小遣錢だ何だッていたぶられるんだから(二)

貧しいなか、肌を寄せ合つて生きる仲睦まじい吉松夫婦の幸せを打ち砕くかのように、「雨の所為でか。氣の毒なこッだ。相手が相手だから喧嘩にも成らねえ」「又大降に成ツて来やアがツた」と、雨がお重の登場を予兆させるようなかたちで強く降り出す。

「近刊合評」⁽¹⁹⁾の「河畔人」に「此一小短篇にも柳浪子の戯曲的才能は、遺憾なく發揮せられている」、「人物の出入交錯全く舞台で見るやうに面白く自然らしく出来ている」とする見解があるとおりに、お重は歌舞伎で演じられる典型的な悪婆である。お重の登場を予兆させるかのように強く降り出す雨は、歌舞伎で頻繁に使われる大太鼓を打ちつけることにより登場人物の気持ちや場面の情景を表現する手法を連想⁽²⁰⁾させる。

吉松が親方からの預り物を持って出掛けた後、お重がお八重に「お前の容色^{きりよう}があつてさ、今一度奮発して御覧な、随分立派な、歴とした旦那が直き出来様でもんだ」、「旦那取が可厭だッて云ひや亭主にしたッて、もツと甲斐性のある男が、降るほどあら

うではないか」「吉さんなんぞに、何時まで附いたツてお前」という打算的な言葉は、吉松に対する無慈悲な悪意を示すものである。また、お重の「おいらは何様事があつたツても、お前を手放す事は出来ねえから、お前が依然吉さんと手を切らなきゃ、私も吉さんの仕送を受けなくツちやならねえから、其積で居て貰はうよ」と、煙草を吸いながらの強請は、煙管が不可欠な小道具となる歌舞伎の悪婆役に通じる。また、悪婆役の一つの大きな特徴は言葉であり、「特に男言葉を使い、時に喉を切り、いたつて通俗的な言葉遣いが悪婆の印である」が、お重の強請も同様であるといえる。

「何を云ツてやがるんだ。相手にするだけ馬鹿くしいよ。吉さん。」と、お重はお八重が罵るのを耳にも掛けないで、「雨が霽がりやね、私にだツて何とか成るんだよ。此雨の中が凌げないから、其で態々出て来たんじゃないか。(中略) お重は又例の紙巻苘を出してすばくしく喫むのであつた。(中略) 「真平御免だよ。」と、お八重は云放つた。

「何だ、真平御免だ。此阿魔ア、阿母に对やアがツて。」お重がお八重へ立掛らうとするのを、吉松は慌忙で押隔て、

「阿母ア、堪忍してお呉んなせえ。お八重、お前が何にも

云ふには及はねえや。(五)

お重は、吉松の「此後幾日も此様天気でも居めえから、長い間とは云はない、三日ばかり待つてお呉んなさいな、後生だから」という懇願も聞き入れない。吉松はお重の無理無体に対し、ひたすらなだめ、詫びていたが、お重は「此雨が止んじふまで、此家へ置いて貰はうではないか——御邪魔でも、ねえ吉さん」と、居直る。下品な言葉遣いや仕草が悪婆の演技の一つの見せ場であり、悪婆について、河竹繁俊は「粹で伝法肌であだっばくて、思う男のためにはゆすり、つつもたせ、盗み、人殺しなどもあえて辞さないという例がふつうである」、「これら悪婆の演出形式にもほぼ定型があつて、下層社会に似つかわしいみだれ着付け」、「ことばづかいもすこぶる伝法で、たいていはたんかを切る場面があつた」と説明している。

『雨』より前に発表された『段だら染』(「万朝報」明治二九年二月一日・四月二三日)は、広津柳浪のどの作品集にも所収されず、現在では知られていない小説だが、『雨』と同じく父親不在で貪欲な母親に利用される娘の物語として位置づけることよつて、柳浪が追い求めていた問題を探るのに有効であると考ええる。『段だら染』でも、やはり実母お市は娘にお金の

無心を練りかえすという設定が共通している。「段だら染」の内容を簡単に確認しておく。

母親のお市は、長女お妻を去者に、三女お光を銘酒屋の女として働かせていたが、強欲なお市は、九才の年より養女に出していた次女のお捨を取り返し、客をとらせて貢がせようとした。ところが運よく堅気の家嫁に嫁いでいた長女お妻が、某省参事官の夫高松立郎の力を借りてお捨をその苦境から救つてやる。お市は三人の娘からそむかれ、コレラに罹つて死ぬことになる。「段だら染」の母お市と「雨」のお重と共通するところは、つぎのような一節である。

「金にさへなれば、何人たれにでも我娘を売物の味を占めたる」お市は、次女お捨を養家より取り返し、客をとらせようと「煙草の煙を長く吐いて、打仰ぎたる眼の色凄く、お捨をじろりと下眼に見ながら」、「手前の様な剛情な餓鬼ツちやねえ。お市が手中の煙管はお捨が肩をかたと打ち」、逃げようとするお捨を「此阿魔ア。お市が声は雷の如く、手は電光の如く、運拙なく掛金へ止められしお捨が袖を引掴みぬ」というように、貪欲な母親として設定されている。また、お市は三女お光にも「美代吉の如き者に引掛り居りては、立身の妨害ともなれば、奇麗に思断おもひきりつて、もつと金のある男に乗替へよ」と言う。このように

『雨』のお重と共通する強請場での煙管を用い、また男言葉を使い、時に啖呵を切り、無慈悲な打算的な『段だら染』のお市の言動には、悪婆の基本的な型が明瞭に示されている。

しかし、『雨』と『段だら染』には相違点もある。次にそれを検討したい。

四、お八重と吉松の夫婦愛

『雨』には、母お重・お八重・吉松の心理推移、追いつめられていくなかで憎悪と怒りが次第に膨張していく内面のプロセスが描かれている。

このこのうち宅はね、吉さんと私とが立ッてるんだからね、お金の相談や何かはね、私だッて黙ッて聞ける訳には行かないだよ。左様ではないかね、(中略)吉さんだッて私のつながら関係から、阿母さんくゝて優しくしてお呉れなんぢやないか。私は其が實に嬉しい——吉さんが阿母さんを優しくしてお呉れだから、私は何様に嬉しいか知れないよ。ね!(五)

右の引用を見ても、お八重と母お重とは、肉親でありながら

金銭の授受をとおし、かろうじてつなぎとめられている関係にすぎなくなっている。お八重は吉松によつて八王子の達磨茶屋から脱出できた。その辛い記憶を抱える女であるからこそ、吉松のお重に対する心づかいを喜ぶのである。

お八重は作品冒頭近くで吉松に「お天氣の所為で、此様に困つてる最中に、阿母さん迄お前さんに無理を云ひに来るんだもの、私は実に済まないと思つて」いるというと、吉松は「お前のお袋は乃公のお袋じゃねえか」と答える。また、「彼様阿母さんがあるものだから、未始終はお前さんに愛想を尽かされはしまいかと思つて」という言葉からも明らかのように、吉松に捨てられないかおびえ、心細さを感じているお八重の姿が描かれている。そのようなお八重に「乃公が早く一人前に成りせえすりや、今の思はさせねえ」という吉松の台詞は、夫婦の愛情を浮かび上がらせるのである。また、お重が帰り際、吉松が質入れたお客の品物はすぐに返せないことを見通して、「お八重や、お前も能く考へて見るが可いよ。見切るんなら今の中だ」というが、「吉さんとは何しても切れる事は出来ないんだから……死なば諸共だと思つて、お呉んなさい」、「私には其様不人情な事は出来ないんだよ。吉さんに働が無くつて一生今日の様だからつて、私は少しも厭はないのだから」と、お重に反発を

あらわにするお八重の言動は、吉松に対する熱い想いを示している。

一方、『段だら染』では、下谷の数寄屋町で左褌を取つていた長女お妻は、高松立郎に落籍され、飯田町の邸で優雅に暮らしているが、「お捨を引取りし事就ては其振方を付ねばならぬ。其には十円ばかり都合して貰ひたし」と、母のお市が娘お妻の嫁いだ後も何かと金の無心をする貪欲な人物である点は『雨』と共通する。だが、お妻は夫立郎に十円出させ、その後も母お市に悩まされるが素直に従う娘の關係が明示される。「姉ながらも一家の主婦たるべき品格の備わり、侍女などの其前に戦々競競たるを見ては、柳町へ来し時の姉の様には忸れ難き」とお捨がいうように、お妻は某参事官の夫の身分に見合った妻としての努めを果たそうと懸命の努力を続け、使用人を扱うものとしての高松家の価値観や習慣、行動規範を身につけようとする。お妻が夫立郎に「新開地のわい／＼連ですからね、私は其わい／＼連の娘ですから、本当にお氣の毒様で御在ます」という言葉のとおり、そこには玉の輿としての結婚ゆえの身分差の問題があるはずだが、残念なことに『段だら染』には、登場人物の内面の葛藤が十分に描かれていない。

これに対して、『雨』では、お八重が母親にたてつきながら、

「此宅はね、吉さんと私とが立ッてるんだからね」と、ささやかな家庭をまもり吉松に尽くす姿が鮮やかに示されている。先にも述べたように、心底からお八重を愛している吉松は、たんにかたちだけでなく、お重に尽くそうとする。お重はそんな吉松の人の好きや律儀さにつけ込み、「長い間とは云はない、三日ばかり待つてお呉んなさいな、後生だから」という吉松の懇願も聞き入れず、お八重とさんざん醜くやりあつたあげく「此家へ置いて貰はうではないか——御邪魔でも、ねえ吉さん」と、無理難題をふっかける。お八重を押さえる立場に立つてきた吉松が、親方からの預り物を持って家を飛び出し、お八重を見返つて淋しげな笑を見せて去つた後、「お八重は不図染々世の中が可厭いやなよう様な気が為た」とある。お八重の涙を浮かべながらの「実に気の毒だツちやアないは。吉さん勘忍してお呉んなさいよ」という言葉からも明らかのように、お八重に大きな悲運が影を投げかけ、忍耐の度を超すものとなつていくことが読者の心に強く印象づけられる。

吉松は預かつた仕立物を親方に返すという口実で持ち出し、その帰りに酒や牛肉を買い、義母お重とお八重を喜ばせる。しかし、吉松がお客の物に手をつけたことを知つたお八重は、激しく動揺する内面を押さえながら、母お重に根本的な原因があ

り、吉松は律儀者であるがゆえに、罪を犯さざるを得なかつたことを理解する。お八重の「私の方で云ふ事だは。吉さん、云後れたけれども、何卒勘忍してお呉んなさいよ」という言葉には、明らかに母お重に対する開き直りの意味合いが込められている。母親のたびたびの無心に耐えかねて、「二人一処に、何うにでも、成る様に成つ了へば、私は實に本望」というお八重の言葉は、そのような決意を踏まえてのことである。

お八重は母お重によつて一方的に蹂躪され、無理難題を仕方なく受け入れることによつてのみ成り立つ親子関係というものが、いかに苦渋に満ちたものであるかを自覚する。吉松の「お前と別れて、何を為たツて面白い事があるものか。又お前に苦労をさせるのは、乃公にや出来ねえ」という言葉に象徴されるように、吉松お八重夫婦の暖かな愛情が強調されているのである。

ここで、示唆的と思われるのは、明治三五年、明治民法の法典調査会委員の奥田義人の言葉である。「我国家族制度の前途に就て」という講演で、「明治維新まで存続していた家族制度は封建制度の廃止と欧米の個人主義の流入によつて崩れさつた」、「家の名誉、家の恥辱と思ひ居りしものは皆個人の名誉、個人の恥辱となり來つたことは、諸君が銘銘の家の情態じやうたいに就て

之を見れば直ちに明かなることである」と変化した家族の状況を指摘する。奥田義人の言葉をあわせて考えるなら、「此宅はね、吉さんと私とが立ッてるんだからね」というお八重は、夫婦の絆をとおして、家が主体でなく人間が主体である家づくりをしていると読みとることができる。

五、おわりに

以上のように、『雨』は下層の庶民の実態を詳細に描き出している。『最暗黒の東京』、不通庵の「貧民窟」と類似した題材が取り上げられ、雨に閉ざされたその日暮らしの貧民の窮乏を浮彫りにし、物価暴騰による「打壊」の不安や、近所のお志米一家の窮乏が活写されている。

だが、『雨』は当時の下層社会に眼を向け、社会的な広がりのある労働問題・労働者の差別の諸相をとりあげながら、それを批判し、問題を追及するには不徹底だったと言わざるをえない。柳浪の作品には一見すると、社会小説に近いと読める小説があるが、吉田精⁽²⁴⁾のいうように「現実観察に鋭い眼を持ちながら、それを批判的につかむ深さを欠き、結局平面的な写真に終始した」のである。

『雨』は、社会小説へと到達できなかった柳浪の限界が見られるが、吉松とお八重の心理解剖、感情のほのかな揺れ動きさまの描写を評価することができる。福田清人⁽²⁵⁾が「副人物が残酷なればなる程、弱き主人公の行動は、生々とし作品効果があがるのである」と述べているように、弱き吉松とお八重夫婦を副人物の母親お重がぎりぎりのところまで追いつめ、返す力でお八重が「吉さんとは何しても切れる事は出来ないんだから……死なば諸共だと思つて、お呉んなさい」と、吉松に対する情愛から母お重に言うくだりは、吉松との愛情の深さを的確に浮かび上がらせている。お八重は、母親お重によって一方的に蹂躪され、自分の母親のために罪を犯した吉松によって、より強靱な自己の覚醒を果たしたのである。

『雨』の結末は「二日過ち三日過つ中に、種々の噂の種にさられたが、死んだのか生きて居るのか、結局分らず了ひであつた」と吉松・お八重を行方不明にしているが、これは巧みなエンディングだと考えられる。柳浪は、吉松夫婦の変わらない愛情が続く可能性だけは残したのである。

(注)

(1) 「作家苦心談」『新著月刊』東華堂 明治三〇年四月

- (2) 「近刊合評」「文藝界」明治三十五年一月
- (3) 吉田精一『自然主義の研究 上巻』東京堂 昭和三〇年一月
- (4) 猪野謙二『日本現代文学史(一)』『日本現代文学全集 別巻』講談社 昭和五四年六月
- (5) 榎本隆司『「社会小説」——広津柳浪「雨」——』早稲田大学教育会 昭和六一年一二月
- (6) 大塚博『柳浪「雨」試論』『定本廣津柳浪作品集 別巻』冬夏書房 昭和五七年一二月
- (7) 広津柳浪『段だら染』春陽堂 明治二九年一二月
- (8) 松原岩五郎『最暗黒の東京』民友社 明治二六年一二月
- (9) 不通庵「貧民窟(一)」『浮世眼鏡』『文藝倶楽部』博文館 明治三五年六月
- (10) 不通庵「貧民窟(四)」『浮世眼鏡』『文藝倶楽部』博文館 明治三五年九月
- (11) 東洋経済新報社編『日本気象総覧(上)』東洋経済新報社 昭和五八年九月
- (12) 注(2) 同じ。
- (13) 横山源之助『日本の下層社会』教文館 明治三二年一月
- (14) 「雑報」「帝国文学」明治三〇年一月
- (15) 注(3) 同じ。
- (16) 福田清人『硯友社の文学運動』『明治文学研究(1)』山海堂出版部 昭和八年二月
- (17) 注(1) 同じ。
- (18) 伊狩章『硯友社の文学』塙書房 昭和三六年一〇月
- (19) 注(2) 同じ。
- (20) 八板賢二郎『音で観る歌舞伎——舞台裏からのぞいた伝統芸能——』新評論 平成二一年一月
- (21) グラム ヴアレリー『「悪婆」試論——台帳における用法を中心に——』『日本文学』平成一三年一〇月
- (22) 河竹繁俊編『演劇百科大事典 第一巻』平凡社 昭和三五年三月
- (23) 有地亨『民法典の成立と家族観の変容』『近代日本の家族観——明治篇』弘文堂 昭和五二年四月
- (24) 注(3) 同じ。
- (25) 注(16) 同じ。
- (付記)
※ 本文の引用は決定稿(『定本 広津柳浪作品集 下巻』

冬夏書房 昭和五七年一二月の本文による。

※ 旧字体は適宜新字体に改め、ルビを簡略化した部分がある。

(ひらた えみこ／本学大学院修了)